

典座教訓

觀音導利興聖寶林輝寺比丘道元撰す

佛家に本より六知事有り。共に佛子たり。同じく佛事を作す。中に就いて典座の一職は、是れ衆僧の辨食を掌どる。禪苑清規に云く、衆僧を供養す故に典座有りと。古より道心の師僧、發心の高士充て來るの職なり。蓋し一色の辨道に宿る歟。若し道心無き者は、徒に辛苦を勞して畢竟益無し。

禪苑清規に云く、須らく道心を運らして時に随つて改變し大衆をして受用安樂ならしむべしと。昔日瀉山洞山等之を勤め、其の餘の諸大祖師も曾て經來れり。所以に世俗の食厨子及び饌夫等に同じからざる者歟。山僧在宋の時、暇日前資勤舊等に咨問するに、彼等聊か見聞を擧して以て山僧の爲に説く。此の説似は、古來有道の佛祖遺す所の骨髓なり。大抵須らく禪苑清規を熟見すべし。然して後に須らく勤舊子細の説を聞くべし。所謂當職一日夜を經、先づ齋時罷、都寺監寺等の邊に就いて、翌日齋粥の物料を打す、所謂米菜等なり。打得し了つて之を護惜すること眼睛の如くせよ。保寧の勇禪師曰く、眼睛なる常住物を護惜せよと。之を敬重すること御饌草料の如くせよ。生物熟物、俱に此の意を存せよ。次に諸の知事、庫堂に在つて商量すらく、明日甚の味を喫し、甚の菜を喫し、甚の粥等を設くと。

禪苑清規に云く、物料并に齋粥の味數を打するが如きは、竝に預先庫司知事と商量せよと。所謂知事とは、都寺、監寺、副寺、維那、典座、直歳なり。味數議定し了らば、方丈衆寮等の嚴淨牌に書呈せよ。然して後に明朝の粥を設辨す。米を淘り菜を調ふる等、自ら手づから親しく見、精勤誠心にして作せ。一念も疎怠緩慢にして、一事をば管着し、一事をば管看せざるべからず。功德海中一滴も也た讓ること莫れ、善根山上一塵も亦積むべき歟。

禪苑清規に云く、六味精しからず。參徳給らざるは、典座の衆に奉する所以に非ずと。先づ米を看んとして便ち砂を看、先づ砂を看んとして便ち米を看る、審細に看來り看去つて放心すべからずんば、自然に參徳圓滿し、六味俱に備はらん。雪峯洞山に在つて典座と作る。一日米を淘る次で、洞山問ふ、砂を

淘り去つて米か、米を淘り去つて砂か。峯云く、砂米一時に去る。洞山云く、大衆箇の什磨をか喫す。峯盆を覆却す。山云く、子他後別に人に見え去ること在らんと。上古有道の高士、自ら手づから精しく至り、之を修すること此の如し。後來の晩進之を怠慢すべけんや。先來云ふ、典座は絆を以て道心と爲すと。米砂誤つて淘り去ること有るが如きは、自ら手づから檢點せよ。

清規に云く、造食の時、須らく親しく自ら照顧して、自然に精潔なるべしと。其の淘米の白水を取つて亦虚く棄てざれ、古來は漉白水囊を置いて、粥米水を辨ず。鍋に納れ了つて心を留め護持して、老鼠等をして觸誤し、竝に諸色の閑人に見觸せしむること莫れ。粥時の菜を調へ、次に今日齋時に用ゆる所の飯羹等を打併して、盤桶并に什物調度、精誠淨潔に洗濯し、彼此高處に安ずべきは高處に安じ、低處に安ずべきは低處に安ぜよ。高處は高平、低處は低平に。挾杓等の類、一切の物色、一等に打併して、眞心に物を鑑し、輕手に取放し、然して後に明日の齋料を理會し、先づ米裏に蟲有らんを撰べ。緑豆、糠塵、砂石等、精誠に擇び了れ。米を擇び秦を擇ぶ等の時、行者諷經して竈公に回向す。次に菜羹を擇び、物料調辨せよ。庫司に隨つて打得する所の物料は、多少を論ぜず、麤細を管せず、唯是れ精誠に辨備するのみ。切に忌む色を作し口に料物の多少を説くことを。竟日通夜、物來つて心に在り、心歸して物に在らしめ、一等に他と精勤辨道す。參更以前に明曉の事を管し、參更以來に做粥の事を管す。當日の粥了りて、鍋を洗ひ飯を蒸し、羹を調ふ。齋米を浸すが如きは典座水架の邊を離るること莫れ、明眼に親しく見て一粒を費さざれ。如法に洮汰し、鍋に納れて火を燒き飯を蒸す。古に云く、飯を蒸す鍋頭を自頭と爲し、米を淘りて水は是れ身命なりと知ると。蒸し了る飯は便ち飯羅裏に收め、乃ち飯桶に收めて擡槃の上に安ぜよ。菜羹等を調辨すること、應に飯を蒸す時節に當るべし。典座親しく飯羹を見て調辨處在し、或は行者を使ひ、或は奴子を使ひ、或は火客を使ひて、什物を調へしめよ。近來大寺院に飯頭羹頭有り、然れども是れ典座の所使なり。古時は飯羹頭等無し、典座一管す。凡そ物色を調辨するに、凡眼を以て觀ること莫れ、凡情を以て念ふこと莫れ。一莖草を拈じて寶王刹を建て、一微塵に入つて大法輪を轉ぜよ。所謂縦ひ莆菜羹を作るの時も、嫌厭輕忽の心を生ずべからず。縦ひ頭乳羹を作るの時も、喜躍歡悅の心を生ずべからず。既に耽着無し、何ぞ惡意有らん。然れば則ち麤に向ふと雖も全く

怠慢無く、細に逢ふと雖も彌精進有るべし。切に物を逐うて心を變ずること莫れ。物を逐うて心を變じ、人に順つて詞を改むるは、是れ道人に非ざるなり。志を勵まして至心ならば、庶幾くは淨潔なること古人に勝れ、審細なること先老に超えん。

其の運心道用の爲體は、古先は縦ひ參錢を得て莆菜羹を作るも、今吾れ同じく參錢を得るときは頭乳羹を作らむと。此事難爲なり。所以は何ん、今古殊異にして天地懸隔す、豈肩を齊うするを得る者ならんや。然れども審細辨肯の時は、古先を下視するの理、定んで之有るなり。此の理必然なるすら猶未だ明了ならざるは、卒に思議紛飛して其の野馬の如く、情念奔馳して林猿に同じきに由つてなり。若し彼の猿馬をして一旦退歩返照せしめば、自然に打成一片ならん。

是れ乃ち物の所轉を被るとも、能く其の物を轉ずるの手段なり。此の如く調和淨潔にして、一眼兩眼を失すること勿れ。一莖菜を拈じて丈六身と作し、丈六身を請して一莖菜と作す。神通及び變化、佛事及び利生する者なり。已に調へ、調へ了つて已に辨じ、辨じ得て那邊を看し這邊に安き、鼓を鳴らし鐘を鳴らし、衆に隨ひ參に隨つて朝暮請參し、一も虧闕すること無かれ。

這裏に却來して、直に須らく目を閉ぢて堂裏幾員の單位、前資勤舊獨寮等幾ばく僧、延壽、安老、寮暇等の僧、幾箇の人か有る、且過に幾板の雲水、菴裏に多少の皮袋ぞと諦觀すべし。此の如く參來し參去して、如し纖毫の疑猜有らば、他の堂司及び諸寮の頭首、寮主、寮首座等に問へ。疑ひを銷し來つて便ち商量すらく、一粒米を喫するに一粒米を添え、一粒米を分ち得れば却つて兩箇の半粒米を得。三分、四分、一半、兩半なり。他の兩箇の半粒米を添ふれば、便ち一箇の一粒米と成る。又九分を添ふるに、剩り幾分と見、今九分を收めて、他幾分と見る。一粒の盧陵米を喫得して便ち瀋山僧を見、一粒の盧陵米を添得して又水牯牛を見る。水牯牛瀋山僧を喫し、瀋山僧水牯牛を牧す。吾れ量得すや也た未だしや、倆筭得すや也た未だしや。檢し來り點し來つて分明に分曉し、機に臨みて便ち説き、人に對して即ち道へ。且つ恁のごときの功夫、一如二如、二日三日、未だ暫くも忘るべからざるなり。施主院に入りて財を捨し齋を設けば、亦當に諸の知事一等に商量すべし、是れ叢林の舊例なり。回物俵散は同じく共に商量せよ。權を侵し職を亂すことを得ざれ。齋粥如法に辨じ了らば案上に安置し、典座袈裟を搭け坐

具を展べ、先づ僧堂を望んで焚香九拜し、拜し了つて乃ち食を發すべし。
一日夜を經、齋粥を調辨し、虚しく光陰を度ること無れ。實の排備有らば、舉動施爲、自ら聖胎長養の業と成らん。退歩翻身せば、便ち是れ大衆安樂の道なり。而あるに今我が日本國、佛法の名字聞き來ること已に久し。然あれども僧食如法作の言、先人記せず、先徳教へず。況んや僧食九拜の禮、◎
山僧云く、育王這裏を去つて多少の路か有る。座云く、三十四五里。山僧云く、幾時か寺裏に廻り去るや。座云く、如今樁を買ひ了らば便ち行かん。山僧云く、今日期せずして相會し、且つ舶裏に在つて説話す、貴好結縁に非ざらんや、道元典座禪師を供養せん。座云く、不可なり、明日の供養吾れ若し管せずんば便ち不是にし了らん。山僧云く、寺裏何ぞ同事の者の齋粥を理會する無らんや、典座一位不在なりとも什麼の欠闕か有らん。座着く、吾れ老年にして此の職を掌る、乃ち毫及の辨道なり、何を以てか佗に讓るべけんや、又來る時未だ一夜宿の暇を請はず。山僧又典座に問ふ、座尊年、何ぞ坐禪辨道し、古人の話頭を看せずして、煩はしく典座に充てて只管に作務す、甚の好事か有る。座大笑して云く、外國の好人未だ辨道を了得せず、未だ文字を知得せざること有り。山僧他の怗地の話を聞き、忽然として發慚驚心して、便ち他に問ふ、如何にあらんか是れ文字、如何にあらんか是れ辨道と。座云く、若し問處を蹉過せずんば、豈其の人に非ざらんや。山僧當時不會。座云く、若し未だ了得せずんば、他時後日育王山に到れ、一番文字の道理を商量し去ること有らんと。怗地に語り了つて便ち座を起つて云く、日晏れ了ん忙ぎ去なんと。便ち歸り去れり。同年七月、山僧天童に掛錫す。時に彼の典座來得て相見して云く、解夏了に典座を退き郷に歸り去らんとす、適兄弟の老子箇裏に在りと説くを聞く、如何ぞ來つて相見せざらんやと。山僧喜踊感激、他を接して説話するの次で、前日舶裏に在りし文字辨道の因縁を説出す。典座云く、文字を學ぶ者は文字の故を知らんと爲す、辨道を務むる者は辨道の故を肯はんと要す。山僧他に問ふ、如何にあらんか足れ文字。座云く、一二三四五。又問ふ、如何にあらんか是れ辨道。座云く、偏界曾て藏さず。其の餘の説話多般有りと難も、今録さざる所なり。山僧聊か文字を知り辨道を了ずることは、乃ち彼の典座の大恩なり。向來一段の事、先師全公に説似するに、公甚だ隨喜するのみ。山僧後に、雪竇頌有り、僧に示して、一字七字三五字、萬像窮め來るに據を爲さず、夜深け

月白うして滄溟に下る、驪珠を搜得して多許有りと云ふを見る。前年彼の典座の云ふ所と、今日雪竇の示す所と、自ら相符合す。彌知る彼の典座は是れ眞の道人なることを。然らば則ち従來看る所の文字は、是れ一二三四五なり、今日見る所の文字も、亦六七八九十なり。後來の兄弟、這頭より那頭を看了し、那頭より這頭を看了し、恁のごとき功夫を作さば、便ち文字上一味禪を了得し去らん。若し是の如くならずんば、諸方五味禪の毒を被つて、僧食を排辨するに、未だ好手を得ること能はざるなり。誠に夫れ當職先聞現證、眼に在り耳に在り。文字有り、道理有り。正的と謂つべし。縦ひ粥飯頭の名を忝うせば、心術も亦之に同ずべし。禪苑清規に云く、二時の粥飯、理すること合に精豐なるべし。四事の供須らく闕少せしむること無かるべし。世尊二十年の遺恩兒孫を蓋覆す。白毫光一分の功德、受用不盡と。然あれば則ち但衆に奉することを知つて貧を憂ふべからず。若し有限の心無くんば、自ら無窮の福有らんと。蓋し是れ衆に供ずるは住持の心術なり。供養の物色を調辨するの術は、物の細を論ぜず、物の麤を論ぜず、深く眞實の心、敬重の心を生ずるを詮要と爲す。見ずや、漿水の一鉢も也た十號に供じて自ら老婆生前の妙功德を得、菴羅の半果も也た一寺に捨して能く育王最後の大善根を萌し、記莂を授かり、大果を感じ。佛の縁と雖も、多虚は少實に如かず。是れ人の行なり。所謂醍醐味を調ふるも未だ必ずしも上と爲さず、莆菜羹を調ふるも未だ必ずしも下と爲さず。莆菜青茶を捧げ莆菜を擇ぶの時、眞心、誠心、淨潔心にして醍醐味に准ずべし。所以は何んとなれば、佛法清淨の大海衆に朝宗するの時は、醍醐味を見ず、莆菜味を存せず、唯一大海味のみ。況んや復た道芽を長じ聖胎を養ふの事は、醍醐と莆菜と、一如にして二如無きをや。比丘の口竈の如しの先言有り、知らずんばあるべからず。想ふべし、莆菜能く聖胎を養ひ、能く道芽を長ずることを。賤と爲すべからず、輕と爲すべからず。人天の導師一莆菜の化益を爲すべきものなり。又衆僧の得失を見るべからず、衆僧の老少を顧みるべからず。自猶自の落處を知らず、他爭か他の落處を識るを得んや。自の非を以て他の非と爲す、豈誤らざらんや。耆年晚進、其の形異なりと雖も、有智も愚蒙も僧宗是れ同じし。亦昨は非なるも今は是、聖凡誰れか知らん。禪苑清規に云く、僧は凡聖と無く、十方に通會すと。若し一切の是非有るも之を管すること莫れ。志氣那ぞ直趣無上菩提の道業に非ざらんや。如し向來の一步を錯らば、便乃ち對面して蹉過せん。

古人の骨髓、全く慙のごときの功夫を作す處に在り。後代當職を掌るの兄弟も、亦慙のごときの功夫を作して始めて得ん。百丈高祖の規繩、豈虚然ならんや。山僧歸國より以降、錫を建仁に駐むること一兩三年、彼の寺愁に此の職を置けども、唯名字のみ有つて、全く人の實無し。未だ是れ佛事なることを識らず、豈敢て道を辨肯せんや。眞に憐憫すべし。其の人に遇はずして虚く光陰を度り、浪りに道業を破ることを。曾て彼の寺此の職の僧を看るに、二時の齋粥に、都て事を管せず、一りの無頭腦無人情の奴子を帶して、一切大小の事、總て他に説向す、正を作し得るも、不正を作し得るも、未だ曾て去つて看せず。隣家に婦女有るが如くに相似て、若し去つて見ることを得ば、他乃ち恥とし乃ち瑕とす。一局を結構して、或は偃臥し、或は談笑し、或は看經し、或は念誦して、日久しく月深けれども、鍋邊に到らず。況んや什物を買索し、味數を諦觀せんや。豈其の事を存せんや。何に況んや兩節の九拜、未だ夢にだも見ざる在り。時至つて童行を教ふるに也た未だ曾て知らず、憐むべく悲むべし。無道心の人未だ曾て有道德の輩に遇見せず、寶山に入ると雖も空手にして歸り、寶海に到ると雖も空身にして還ることを。應に知るべし、他未だ曾て發心せずと雖も、若し一りの本分人を見れば、則ち其の道を行得せん。未だ一りの本分人を見ずと雖も、若し足れ深く發心せば、則ち其の道を行膺せん。既に兩闕を以てせば、何を以てか一益あらん。大宋國の諸山諸寺に、知事頭首の職に居るの族を見るが如きは、一年の精勤を爲すと雖も、各三般の住持を存し、時と與に之を營み、縁を競うて之を勵ます。已に他を利するが如く、兼ねて自利を豐にし。叢席を一興し、高格を一新し。肩を齊うし頭を競ひ、踵を繼ぎ蹤を重んず。是に於て應に詳にすべし。自を見ること他の如くなるの癡人有り、他を顧みること自の如くなるの君子有ることを。古人云く、三分の光陰二早く過ぐ、靈臺一點も揩磨せず、生を貪り日を逐うて區區として去る、喚べども頭を回らさず爭奈何せん。須らく知るべし、未だ知識を見ざれば、人情に奪はるることを。憐むべし、愚子長者所傳の家財を運出して、徒に他人面前の塵糞と作すことを。今乃ち然あるべからざらんや。嘗て當職前來の有道を觀るに、其の掌其の徳自ら符ふ。大瀉の悟道も典座の時なり。洞山の麻三斤も亦典座の時なり。若し事を貴ぶべき者ならば、悟道の事を貴ぶべし。若し時を貴ぶべき者ならば、悟道の時を貴ぶべき者歟。事を慕ひ道に耽るの跡、沙を握りて寶と爲すも猶其の驗有り。形を

摸して禮を作すも屢其の感を見る。何に況んや、其の職是れ同じく、其の稱是れ一なるをや。其の情其の業若し傳ふべき者ならば、其の美其の道豈來らざらんや。凡そ諸の知事頭首及び當職作事作務の時節、喜心、老心、大心を保持すべき者なり。所謂喜心とは、喜悅の心なり。想ふべし、我れ若し天上に生ぜば、樂に着して間なし。發心すべからず、修行未だ便ならず、何に況んや三寶供養の食を作すべけんや。萬法の中、最尊貴なる者は三寶なり、最上勝なる者は三寶なり。天帝も喩ふるに非ず、輪王も比せず。清規に云く、世間の尊貴、物外の優閑、清淨無爲なるは、衆僧を最と爲すと。今吾れ幸に人間に生れて而も此の三寶受用の食を作る、豈大因縁に非ざらんや。尤も以て悦喜すべき者なり。又想ふべし、我れ若し地獄、餓鬼、畜生、修羅等の趣に生れ、又自餘の八難處に生れば、僧力の覆身を求むること有りと雖も、手づから自ら供養三寶の淨食を作すべからず。其の苦器に依つて苦を受け、身心を縛すればなり。今生既に之を作す、悦ぶべきの生なり、悦ぶべきの身なり、曠大劫の良縁なり、朽つべからざるの功德なり。願くは萬生千生を以て一日一時に攝し、之を辨ずべく之を作すべし。能く千萬生の身をして良縁を結ばしめんが爲めなり。此の如き觀達の心乃ち喜心なり。誠に実れ縦ひ轉輪聖王の身と作るも、供養三寶の食を作るに非らざれば、終に其の益無し、唯是れ水沫泡燄の質なり。所謂老心とは、父母の心なり。譬へば父母の一子を念ふが若く、三寶を存念すること一子を念ふが如くせよ。貧者窮者、強に一子を愛育す。其の志如何、外人識らず、父と作り母と作つて方に之を識る。自身の貧富を顧みず、偏に吾が子の長大ならんことを念ふ。自の寒きを顧みず、自の熱きを顧みず、子を蔭ひ子を覆ふ、以て親念切切の至りと爲す。其の心を發すの人能く之を識り、其の心に慣ふの人方に之を覺る者なり。然れば乃ち水を看穀を看るに、皆養子の慈悲を存すべき者歟。大師釋尊、猶二十年の佛壽を分つて末世の吾等を蔭ひたまふ。其の意如何。唯父母の心を垂るるのみ。如來全く果を求むべからず、亦富を求むべからず。所謂大心とは其の心を大山にし、其の心を大海にし、偏無く黨無きの心なり。兩を提げて輕しと爲さず、鈎を扛げて重しとすべからず。春聲に引かれて春澤に游ばず、秋色を見ると雖も更に秋心無く、四運を一景に競ひ、銖兩を一目に視る。是の一節に於て、大の字を書すべし、大の字を知るべし、大の字を學すべし。夾山の典座若し大の字を學ばずんば、不覺の一笑もて大原を度すること莫ら

ん。大滄禪師大の字を書せずんば、一莖柴を取つて三たび吹くべからざらん。洞山和尚大の字を知らずんば、三斤の麻を拈じて一僧に示すこと莫からん。應に知るべし、向來の大善知識は俱に是れ百草頭上に大の字を學し來つて、今乃ち自在に大聲を作し、大義を説き、大事を了じ、大人を接す。者箇一段の大事因縁を成就する者なり。住持、知事、頭首、雲衲、阿誰か此の三種の心を忘却する者ならんや。

峇に嘉禎三丁酉の春、記して後來學道の君子に示すと云ふ。

觀音導利興聖寶林禪寺住持傳法沙門道元記す